

## 6章 まとめ：福岡エイジング・オープン・ミュージアムの課題

### 6 - 1 「来てみんしゃい！グッド・エイジング都市フクオカ」にむけて

福岡市はアジアへの玄関口を謳っている。確かに韓国・中国と地理的に近い。そして今、物流だけでなく、人流が増加している。その中で注目すべきは、人口のエイジング（少子高齢化）に対する取組みを視察に来る人流である。では、福岡市はそうした東アジアからの来訪者に、胸を張って、「来てみんしゃい！グッド・エイジング都市フクオカ」といえるだろうか。こんな素朴な疑問から始まった産学公連携の取組みが「福岡エイジング・オープン・ミュージアム」の構想である。世界一の高齢社会になった日本、そして高齢者保健福祉のみならず高齢者市場を訴求対象にしたビジネス展開でも目覚ましい動きを示す日本。福岡市をそんなエイジング日本の玄関口にふさわしいまちづくりのショーケースにしようというのが、「福岡エイジング・オープン・ミュージアム」の目標である。

今回のさまざまな調査や実験であらためて分かったことがある。

- ・福岡市は、一見若者の多い都市であるが、内部では着実にエイジングが進んでいる。
- ・福岡市は東アジアからもっとも近い日本の玄関口である。また日本は世界一のエイジング先進国であるため、東アジアから視察にこようとする場合に、もっとも便利な地域であるため、近年、この面でのツーリストが増えている。しかし、やはり日本を代表する都市は東京都と大阪市のようで、日本への視察が多い韓国での調査によれば、福岡市を選択して来訪しようとする割合はまだ低い。むしろ岐阜のようなところが、ある施設の熱心な取組みのお陰で人気があることに学ぶ必要がある。地理的近接を誇るだけでは、来訪者の期待に十分応えることにはなりえない。エイジングへの取り組みのベスト・プラクティスを展示する町ぐるみ博物館として想定した場合、福岡市に住む住民、福祉施設や福祉活動を運営する実践者、シルバー産業を起業している経営者、エイジング福祉を担う人材を育成している大学や専門学校の教育者、エイジングに対する行政をつかさどる行政マンや議会人などは、胸を張って「エイジングが進んでも、住んでいてよかった」といえる都市づくりを心がけているといえるだろうか。訪れた東アジアの視察者や研修者が、「エイジングに備えた取り組みをしている福岡市に、訪れてよかった」といってもらえるだろうか。
- ・今回の調査事業で、着実に東アジアには日本に対してエイジングをテーマに訪問したいというニーズがあることが分かった。時期的に中国では民生関係の政治的指導者をめぐる不祥事で、調査不能な状態が発生したために、十分な調査は出来なかったが、それでも数年後は必ず高齢者福祉が政治課題として日程に上ってくるので、それに向けて福岡市と交流を図りたいという声もあがっている。韓国版介護保険制度を準備中の韓国では、いくつかの調査の結果、かなりの需要があることが確かめられた。
- ・エイジングへの取り組み視察ツアーの通訳者養成講座に対する応募状況は予想を越えて多かった。留学生だけでなく、日本人の住民の参加もあり、新しいエイジング福祉文化交流の可能性さえ見通せた。特に福岡市に在住しているが、第一言語として中国語や韓国語を話す人々の関心が高いことがあらためて分かった。これらの人材を活用することが、福岡における新しい事業を起こす上で有利な条件となるだろう。

- ・高齢者保健福祉に関わる通訳者を悩ませるのは、用語の特殊性である。東アジアは漢字文化を基底とする点では共通点が多いといえるが、新しく発達しているエイジングに対する保健福祉に関する用語の世界では、直訳しても意味が通じないほど相互理解が難しい状態になっている。そこで日本で使われている用語をできるだけやさしく、誤解のないように解説する用語事典が必要だと考えて試作した。今回は日韓、日中の用語辞典を作成した。行政や福祉施設では独自に韓国語、中国語でパンフレットを作っているところもあるが、こうした国際ツーリズムに必要なツールの開発は、今後ますます需要が深まるだろう。この用語辞典を作りながら、また通訳養成講座を通して分かったことは、このような用語辞典が、ツーリズムに対してのみならず、在住外国人に対しても必要だということである。
- ・これまでに視察ツアーを受け入れた施設においては、受け入れの際の課題も明らかになった。まだあまり組織化されていないツーリズムであるが、将来性を秘めたものとして、受け入れ側も期待をしているようである。しかしながら、実際のモニター・ツアーなどを通じて分かったことは、あまりにも国内的な業界となっている高齢者保健福祉のサービスや住宅状況は、よほど制度的背景や歴史的経緯などを説明しなければ、日本で取り組んでいることの意味を正確に伝えることはできないということである。施設に対する調査でも、まだ視察をあまり取り組んでいないところは、多様な不安を抱えているが、取り組んだ経験のあるところでは、視察に先立って正確な事前教育を望んでいる。また来訪者が「生活者の暮らす施設を訪問する」上での作法がわきまえられていないことに対する懸念も浮き彫りになった。こうした点を改善するためには、視察に先立つオリエンテーションを、責任もって実施する場と時間を設定する必要があるだろう。普通のツーリズムと違って、福祉施設などでは少人数で視察することが求められるので、そのマネジメントも必要である。「福岡エイジング・オープン・ミュージアム」のキュレーターとでもいうべき、専門的案内所機能が求められているといえよう。今後、韓国では急速に高齢者住宅施設の建設が進められるので、住宅施設建築の基準だけでなく、経営モデル、衛生管理、栄養管理、ヒューマン・サービスの基準、ケアワーカーの労働の質向上、労働場面での補助用具などの使用方法、周辺環境整備などさらに詳しい視察研修ニーズに高まる事が予想される。こうした質問に答えられるような資料の作成が必要になるだろう。
- ・ハートビル法などの普及によって、福岡でもバリアフリーやユニバーサル・デザインを目指す施設や交通スポットが生まれている。しかし施設で働く職員へのヒヤリングと実地踏査で分かったことは、周辺環境の整備水準が低いことであった。福祉施設周辺環境はまだまだバリアフリーには程遠い現状にあり、さまざまな不便を感じているようである。その点検結果を地域生活環境整備の取り組みにまで展開していないことが明らかになった。施設で働く若い女性が夜間安心して通勤できるような環境にないという声も聞かれた。施設内の快適環境整備水準が地域にまで広げられなければ、人々の生活環境としては、決して住みよいものにはならないだろう。新しいまちづくりのフロンティアが提起されているといえよう。もちろん、基盤の整備が間に合わなくて

も、人的な支援活動があれば、福祉水準は維持できる。むしろこれからは地域住民が、自分達の居住環境について、年をとっても住み続けられるところであるかどうか、よそから人を迎えてようこそといえるかどうかという観点から自己点検し、必要とされる物的基盤の整備とヒューマン・サービスの活性化について、自己点検し、産学公協働の解決策に取り組むことが必要であるといえる。

- ・今のところは、まだ福岡市が胸を張って「来てみんなしゃい！グッド・エイジング都市フクオカ」といえるまでにはいたっていない。しかし「福岡エイジング・オープン・ミュージアム」として、エイジングに備えたベスト・プラクティスを提示できる都市になる可能性は高い。特に東アジアからの視察・研修団をターゲットにした取り組みで、そのような都市再生の展望は開かれている。この事業にあわせて、福岡アジア都市研究所では、釜山市との連携を図りながら、福岡市における高齢人口集中地区の発生状況と、その問題状況に対する施策展開もモデル化を調査している。小地域ごとに見ると、高齢人口集中地区になっている所もあちらこちらに生まれている。しかし、高齢者の要介護度など個人の状態に即した対人的な福祉政策は進められているが、交通・防犯・防火・防災・衛生・生活公害など、高齢人口集中地区の生活環境に対する包括的な地域生活支援プログラムはまだ緒についたばかりである。また九州大学東アジアセンター・オン・エイジングが福岡市から始めた「アクティブ・エイジング」の国際リレー・シンポジウムは、いよいよ韓国側にバトンタッチされ、規模も拡大して本格的なシンポジウムに成長して、2007年5月に慶尚南道南海郡で開催されることになった。その次は上海市がバトンを受け継ぐ事を表明している。また九州大学アジア総合政策センターでは、日中韓シンポジウムを開催し、その中にエイジングの分科会を持つようになっている。今後はこうした機会を通じてますます、福岡市に対する東アジアからの関心は高まると考えられる。
- ・「福岡エイジング・オープン・ミュージアム」は、エイジング視察ツーリズムのフィジビリティ調査段階を越えて、いよいよエイジングに備えた新しい地域生活環境整備と生活支援プログラムの社会実験を試みる段階に入ったといえる。

この調査事業を出発点として、「来てみんなしゃい！グッド・エイジング都市フクオカ」とアピールできるまちづくりに向けてのエンジンとして、「アジア高齢社会研究センター」を福岡市に設置する必要があるだろう。